The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



# テーバイと支配者たちの運命
## ——ソポクレース『コローノスのオイディプース』における テーバイに関する神託——[1]

後　藤　志乃風

## 1　はじめに

ソポクレース『コローノスのオイディプース』は，年老いた盲目のオイディプースがアテーナイ郊外のコローノスに辿り着いたところから始まり，その地に受け容れられて死ぬまでを描いた悲劇である．本劇における神託は，主に，オイディプースの人物造型や本劇全体における人間と神との関わりを考察する手がかりとして研究者の注目を集めてきた．その一方で，劇のプロットに果たしている役割については，神託が作品の骨組みを成していると理解されている．すなわち，劇の粗筋と結末を予め観衆に知らせておくことで，所謂 'dramatic irony' を作り出す装置として機能しているということである[2]．また別の側面では，各登場人物による神託理解が，時にその人物の行動を生み出す動力となっていることも指摘されている[3]．作品中の神託は，このような形で本篇の筋立てに深く関わっていると言える．

しかし，本劇で語られる神託の内容は，劇の展開する時間の内側に限定されてはいない．オイディプース個人に降りかかる出来事だけでなく，そ

1　テクストは，H. Lloyd-Jones & N. G. Wilson, *Sophoclis Fabulae*, Oxford, 1990に依拠している．辞典，雑誌等の参考文献は慣例に従って略号で表記する．引用した箇所の訳は，執筆者による．訳中で話者を表示する場合は，オイディプースを「オ：」，イスメーネーを「イ：」と略記する．

2　Ivan M. Linforth, *Religion and Drama in "Oedipus at Colonus"*, London, 1951, p. 92.

3　Linforth（1951）p. 88.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



の死がアテーナイとテーバイに齎す影響も語っており，後者は舞台上で実現しないまま，幕が下りる．そうした神託のあり方は，何らかの効果を期してか，あるいは特殊な作劇上の要請で布置されているのではないだろうか．

このような問題意識のもとに作品を読んでみると，本劇は主人公のアテーナイ到着から死の直後までという短い時間の中で，主人公がアテーナイとテーバイという二つの都市と関わりながら進行していることに気がつく．彼とアテーナイとの関わりは，テーセウスや土地の長老たちとのやりとりによって舞台上で表され，進展する．他方で，舞台に設定されたアテーナイ郊外と隔たったテーバイの状況は，ひとえに各登場人物が述べる情報によって舞台空間に投じられる．この点で，本劇では，神託もまたテーバイの情勢を劇中に関連づける手段として活用されているのではないかと考えられる．

以上のような推測に基づいて，本稿では，『コローノスのオイディプース』における神託の中のテーバイに関する部分に焦点を当てる．以下では，まず，本劇の神託においてテーバイに関わる箇所の内容を明確に把握し，神託の構造を明らかにする（第2章）．次いで，これらの神託に関わる登場人物の発言や行動を観察することで，これらの神託が及ぼしている影響を追究する（第3章）．これらの議論を通じて，テーバイに関する神託が劇のプロットといかなる関わり方をしているか明らかにすることで，本劇における神託の機能に対して，さらに理解を深めたい．

## 2 テーバイに関する神託

本劇には，まとまった分量を持つ神託の内容が語られる部分が，二箇所ある（84-95, 385-415）．第一の神託（84-95）はオイディプースの生涯に関する内容，第二の神託（385-415）はテーバイに関する内容を擁しており，「オイディプースの死がアテーナイとテーバイの将来に関与する」という形で，オイディプースとアテーナイ，オイディプースとテーバイの運命を互いに結び付けている．本劇の神託は，このような三者の連関が骨格を成している．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



第一の神託（84-95）は，アポッローンが τὰ πόλλ᾽ ἐκεῖν᾽ ὅτ᾽ ἐξέχρη κακά「かの多くの災いを託宣した時」（87）に下したものであるが，これはオイディプースが青年期にデルポイの神託所で「父を殺し母と交わる」という神託を授かった[4]時のことだと理解されている[5]．この神託はオイディプースがエウメニデスの神域に辿り着くこと（89f.），その場所こそ彼の終焉の地であり（89f.），そこで彼が客人（クセノス）として受け容れられること（89f.），そして，死の予兆として地震か雷鳴か稲妻が起こること[6]を予示している（94f.）．本劇はオイディプースがコローノスに到着したところから始まり，上に挙げた点は劇中で成就されるので，この神託はほぼ作品の全体像を予告していると言える．一連の文言の中で，劇中では成就を見ないのは，以下の部分である．

> κέρδη μὲν οἰκήσαντα τοῖς δεδεγμένοις, / ἄτην δὲ τοῖς πέμψασιν, οἳ μ᾽ ἀπήλασαν· (92-93)
> 住んだことが受け容れてくれた人々にとって利益（りやく）となり，追放して私をそばに寄せなかった人々にとっては破滅のもととなって．

これは，オイディプースが齎す影響に言及している箇所である．その影響とは，オイディプースが οἰκήσαντα「住んだ」という行為から，τοῖς δεδεγμένοις「受け容れた人々」にとっては κέρδη「利益（りやく）」が生じ，τοῖς πέμψασιν「追放した人々」にとっては ἄτην「破滅」が生ずるというものである．これに先立つ箇所で，オイディプースがエウメニデスの神域に辿り着き，その地で客人（クセノス）として受け容れられることを予示しており（89f.），その神託を根拠にしてオイディプースがコローノスこそその土地だと既に断言している状況では，アテーナイ人がその τοῖς δεδεγμένοις「受け容れた人々」に相当するものと観衆には予感できるであろう．そして，オイディプースの前半生を知る観衆には，彼の祖国テーバイの人々が τοῖς

4 Cf. *OT* 789-93.

5 J. C. Kamerbeek, *The Plays of Sophocles: Commentaries VII the Oedipus Coloneus*, Leiden, 1984, p. 35.

6 劇中ではポリュネイケース退場後に雷鳴が轟き始める（1447ff.）．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



πέμψασιν「追放した人々」に相当するものとも見当がついたと考えられる．従って，「オイディプースが将来アテーナイに利益を齎す一方で，テーバイに破滅を齎す」というオイディプースと二つの都市の関係が，この箇所で示されていると言える．オイディプースへの待遇が齎す影響を予示した92-93行は，父親殺しの穢れた存在であるオイディプースを受け容れることに，将来アテーナイに利益を齎す原因となるという，新たな意味を担わせた．と同時に，オイディプースがテーバイの将来にとっても関わりを持つ存在であることを，この箇所は仄めかしている．オイディプースをめぐる神話において，テーバイは深い関わりのある都市であるが，本劇において，オイディプースが登場した時点では，既に追放されて久しく，関係もほぼ断絶している．この神託は，そのように隔たっていたオイディプースとテーバイの間に，再び関わりを生じさせる役割を果たしている．

このように，第一の神託（84-95）は，オイディプースとアテーナイ，オイディプースとテーバイの関わり合いの骨格を明らかにしている．しかし，ここで言われるκέρδη「利益」がどういう事態を指すのか，ἄτην「破滅」がどういう事態を指すのかには，まだ触れていない．

第二の神託（385-415）は，第一の神託とは独立に，テーバイ人の神託使がデルポイの神託所で授かってきてテーバイに伝えたもので[7]，それをさらに劇中ではイスメーネーがオイディプースに伝えるという格好になっている．彼女は，オイディプースとアンティゴネーとの再会を喜ぶ応酬の後で，現在のテーバイの状況とそれに至る経緯を説明する（365-81）．この説明から，現在テーバイを支配しているのはエテオクレースで，彼に追放されたポリュネイケースがその王権を奪還するべく，アルゴスの軍勢を頼みとしてテーバイに攻め入ろうとしていることがわかる．なお，ここで語られる兄弟の対立は，よく知られたテーバイ攻めの伝承を踏襲しており，その伝承に照らせば，本劇の「現在時」がアルゴス軍によるテーバイ攻めの直前に設定されていることが理解できる．

イスメーネーは，ここで知らせたテーバイの情勢に照らし合わせながら，神託を開示していくが，その内容は，一行ないし二行ずつの短い台詞から

7 Cf. 412-15.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



成るオイディプースとの対話中に埋め込まれている．神託の内容をめぐる問答は，以下のように始まる．

Οι. τί δὲ τεθέσπισται, τέκνον;
Ισ. σὲ τοῖς ἐκεῖ ζητητὸν ἀνθρώποις ποτὲ
θανόντ' ἔσεσθαι ζῶντά τ' εὐσοίας χάριν.
Οι. τίς δ' ἂν τοιοῦδ' ὑπ' ἀνδρὸς εὖ πράξειεν ἄν;
Ισ. ἐν σοὶ τὰ κείνων φασὶ γίγνεσθαι κράτη. (388-92)
オ： 何が託宣されたのか，子供よ？
イ：かの地の人々によっていつかあなたが死んでいても
生きていても幸福のために捜し求められるだろうということが．
オ：だが，誰がこのような男から良くしてもらえるだろうか．
イ：あの人達の勝利は，あなたのうちに生じると言われています．

何が託宣されたのかと尋ねたオイディプースに対して，イスメーネーがまず教えるのは，「かの地の人々」すなわちテーバイ人たちが彼らの幸福の為にオイディプースを捜し求めるだろう，ということである（389f.）．この中で，オイディプースの状態に関する興味深い限定が付け加えられている．すなわち，θανότ' ...ζῶντά τ'「死んでいても生きていても」（390）という表現である．死後のオイディプースが捜し求められるというのは，亡骸か，もし埋葬されていれば，それを葬った墓が捜索されるという意味だと解される．この語順では，生存中か死後かが二つの事象の生起する順序と逆に配置されており，θανότ'「死んだ後」（390）の方が重要な意味を持っていることを仄めかしているように見える．εὐσοίας χάριν「幸福のために」（390）という文言の意味は，次のイスメーネーの台詞で明らかになる．彼女は，彼らテーバイ人の勝利がオイディプースしだいであると噂されていることを告げる（392）．このφασὶ「人々が話している」という表現は，下された神託の内容を告げると同時に，現在のテーバイにおいてその神託が，迫り来るアルゴスとの戦争に関係するものと解釈されていることを表している．そして，テーバイ人の意向を受けて現にクレオーンが来訪することを，イスメーネーは予告する（396f.）．彼の来訪目的とその背後にあ

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



るテーバイ人の意図をめぐる対話の中で，第二の神託の，もう一つの重要な点が明らかにされる．

Ισ. ὥς σ᾽ ἄγχι γῆς στήσωσι Καδμείας, ὅπως
κρατῶσι μὲν σοῦ, γῆς δὲ μὴ ᾽μβαίνῃς ὅρων.
Οι. ἡ δ᾽ ὠφέλησις τίς θύρασι κειμένου;
Ισ. κείνοις ὁ τύμβος δυστυχῶν ὁ σὸς βαρύς. (399-402)

イ：カドモスの国の近くに彼らがあなたを立たせるためです，
あなたを手中におさめる一方で，あなたが国の境界の中に足を踏み入れないように，と．
オ：だが，私が門扉のところに横たわっていたら，その助けとは何なのか？
イ：あなたのお墓が，もし不幸であれば，あの人たちにとって過酷なものとなります．

ἄγχι γῆς ... Καδμείας「カドモスの国の近く」(399) とは，テーバイ人にとってオイディプースの身柄を手許に確保でき，それでいて彼が城市の内部に足を踏み入れるのを阻止できる場所を意味する．それは，近親殺人を犯したオイディプースの穢れが持ち込まれるのを恐れている為だが，その扱いは彼の死後までも適用される見通しになっている(406f.)．しかし，オイディプースは，テーバイ人によってその幸福の為に捜し求められるだろうとの託宣を知った直後であるので，テーバイ人は自分が死なないうちにテーバイに復帰させようとしているのだと推測している[8]．彼にとって「カドモスの国の近く」とは予想外の答えであり，彼はそれを θύρασι「門扉のところに」(401) と言い換えて疑義を呈する．この質問文では，同時に，オイディプースの生死が問題にされている．κειμένου「横たわっていたら」という，死体の状態を含意する表現は唐突に感じられるが，既に聞かされた θανόντ᾽「死んだ後」(390) を言い換えたものと見ることができる．イ

8 R. C. Jebb, *Sophocles: Plays: Oedipus Coloneus*, Cambridge, 1900, rep. 2004. p. 71. なお，395 行では，オイディプースは，生きている状態を指す γέροντα「老人」(395) という語で自分自身を言い表している．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



スメーネーの返答は，オイディプース亡き後の，彼の墓に潜在する祟りの可能性を示唆している．墓が δυστυχῶν「不幸であれば」(402) とは，正当な供養が受けられない事態を指すと考えられる[9]．もしオイディプースが放浪したまま死を迎えてしまえば，彼が埋葬と供養に与れなくなる可能性が十分にあるので，テーバイの人々はオイディプースが生きているうちにその身柄を手に入れようとしているのである．彼は，テーバイ人が国境の近くに彼を置いておき，死後はそこに埋葬するつもりでいることを聞き知ると，決して彼らの意向に従わない決意を表明する (404-08)．ἐμοῦ γε「少なくとも私を」(408)，οὐκ ... ποτε「決して」(408) という語句が，その根底にテーバイ人の処遇に対する激しい反発があることを示している．続く対話のうちに，その決意がテーバイ人に齎す事態が言い明かされる．

Ισ. ἔσται ποτ᾽ ἆρα τοῦτο Καδμείοις βάρος.
Οι. ποίας φανείσης, ὦ τέκνον, συναλλαγῆς;
Ισ. τῆς σῆς ὑπ᾽ ὀργῆς, σοῖς ὅταν στῶσιν τάφοις. (409-11)
イ：ではそのことがいつかカドモスの国の人々にとって悲嘆のもとになるでしょう．
オ：我が子よ，どのような事態が起こったために？
イ：あなたの墓のところに彼らが立ったときに，あなたの怒りによって．

イスメーネーは，オイディプースの決意がいつかテーバイ人に悲嘆を引き起こすだろうと告げ (409)，その災いは，彼らがオイディプースの墓のところに立った時，オイディプースの怒りによってもたらされるだろうと述べる (411)．ここにおいて，オイディプースの墓はテーバイ人に災いをなしうる場所として，特別な意味合いを獲得している．なお，イスメーネーの言葉の背後に神託が存在することは，後続する数行の会話 (412-15) から明らかである．

以上考察してきたように，第二の神託 (385-415) は，オイディプースとテーバイの運命の関わりに焦点を当て，死後のオイディプースが及ぼす

9 Jebb (1900) p. 71.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



祟りの力を明らかにしている．この神託では，神託が下された時点から見て未来に属することが言われているが，その出来事の一つ一つが時間的に限定し難いのを特徴としている[10]．例えば，テーバイ人がオイディプースを捜し求めるのがいつから始まっていつ終わるのか，伝えられた神託の文言からは判断できない．また，彼の墓が災いをなすことについても，墓は死後から半永久的に存在する以上，被る相手が同時代のテーバイ人なのかその子孫なのか限定することが出来ず，災いが起こる可能性は時間的に大きな広がりを帯びている．

これまでの議論を踏まえて，二つの主要な神託の関係を，特にプロット中のテーバイの位置づけという観点で考察したい．第一の神託（84-95）では，オイディプースとアテーナイ，オイディプースとテーバイの運命の関わり合いが端的に示されている（92f.）．それは，オイディプースが将来アテーナイに利益を齎す一方で，テーバイに破滅を齎すというものだが，その契機となるのは，オイディプースがコローノスに οἰκήσαντα「住んだ」ことである．第二の神託（385-415）は，オイディプースとテーバイの関わりについて，オイディプースの墓が災いをなすという新たな情報を付け加え，第一の神託を補強している．このような形で，本章で取り上げた二つの神託は，テーバイにとってのオイディプースの重要性を明らかにし，テーバイが再びオイディプースに関わってこざるを得ないような背景事情を整えていると言える．

## 3 神託の影響とテーバイに関する予示表現

前章で観察したように，二つの主要な神託は，オイディプースが将来テーバイに災いを齎すことを告げている．これらテーバイに関する神託が本劇において担っている役割は，この神託が登場人物の言動や選択に及ぼしている影響を通して量ることができる．そこで，本章では，登場人物が神託をどのように受け止めて行動しているか，時間の流れに沿って観察する．特に，劇中の諸処でオイディプースが語る，テーバイやその支配者である

10 神託の中では，ποτὲ「いつか」（389, 409）とだけ言われている．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



息子たちの将来に関する話は，本劇における神託のあり方を論ずる上で，注目に値すると思われる．

さて，本劇で，テーバイに関する神託の影響を強く受けて行動する人物は，オイディプース，イスメーネー，クレオーン，ポリュネイケースの四人である．四人のうち，オイディプースは，登場した段階で既に第一の神託（84-95）を知っており，第一エペイソディオンにおいて，イスメーネーから第二の神託（385-415）を聞かされる．それに対して，イスメーネー，クレオーン，ポリュネイケースは，第一の神託を知らず，第二の神託のみを知っている．第二の神託が求められた経緯や具体的な時期は詳らかにされていないが，ポリュネイケースとエテオクレースがともにこの神託を知っているとイスメーネーが証言していることから（417），兄弟が決裂してポリュネイケースがテーバイを追放される以前に下されたことは明らかである．つまり，テーバイにこの神託がもたらされてから，テーバイ人がこの神託に基いてオイディプースを帰国させようとするまでに，時間的なずれ（time lag）が存在する．このずれは，本劇のプロットにおいて重要な意味をもっている．というのも，第二の神託は，テーバイがオイディプースの身柄と墓を自国で保持しておく必要を教示しており，オイディプースを帰国させる十分な根拠となり得る．オイディプースはこの神託を知った直後に，息子たちがその神託を知っているのかどうか確認するが（416），それはこのような可能性に気づいているからである．二人は知っているとイスメーネーが肯定したところで（417），彼ら二人が，テーバイ人にオイディプースの帰国を認めさせる説得材料を有しながら，最初は神託に従わず，彼を放浪の身のままにしておいたことが明らかになる．その動機は父親を思う気持ちよりも王権への欲望が勝った為であったとオイディプースは考え[11]，イスメーネーもそれを認める（418-20）．これは，エテオクレースとポリュネイケースの，テーバイの王権に執着する自己本位な人物像を物語る例証となっている．エテオクレースを支配者とするテーバイ人は，アルゴスとの戦争が間近になった後で，オイディプースの身柄を手に入れようと動き始めた．クレオーンの来訪は，そのように動機づけられている．

11 Kamerbeek (1984) p. 77.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



そしてイスメーネーも，神託とクレオーンの来訪を父親に知らせる為に，コローノスを訪れる．第二の神託は，彼女が登場する背景をなすと同時に，父親思いの人物として印象づけられるのに一役買っている．

ところで，前述した時間のずれから判明する息子たちの行動は，オイディプースの胸に彼らに対する新たな怒りを呼び覚ます．この怒りが呼び水となって，かつて二人が彼の追放を阻止しようとしなかったことに対する旧来の怒りが再燃する．このような憎悪の故に，オイディプースはテーバイの情勢がこのまま進行するのを願う言葉を口にする（421-60）．一連の台詞は，二つの神託を考え合わせた理解に基いている[12]．その中で，彼の願望は，以下に引用するように表明されている．

ἀλλ᾽ οἱ θεοί σφιν μήτε τὴν πεπρωμένην
ἔριν κατασβέσειαν, ἐν δ᾽ ἐμοὶ τέλος
αὐτοῖν γένοιτο τῆσδε τῆς μάχης πέρι,
ἧς νῦν ἔχονται κἀπαναίρονται δόρυ·
ὡς οὔτ᾽ ἂν ὃς νῦν σκῆπτρα καὶ θρόνους ἔχει
μείνειεν, οὔτ᾽ ἂν οὐξεληλυθὼς πάλιν
ἔλθοι ποτ᾽ αὖθις· (421-27)

どうか神々が彼らの宿命の争いを
鎮めませんように，そうして私の中に
今彼らがおかれ，槍を掲げ合おうとしている
この戦いに関する彼らの結末が生じますように！
すなわち，今王笏と玉座を手にしている者は
留まることなく，既に追い出されている者はいつか再び
戻って行かないと良いのだが．

この文言から，差し迫ったテーバイの戦争をオイディプースが歓迎し，争いの継続と進展，現在王位にあるエテオクレースの失脚，既に追放されているポリュネイケースの帰還失敗を願っていることが読み取れる．特に

12 Cf. 452-54.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



ἐν ... ἐμοὶ τέλος αὐτοῖν γένοιτο τῆσδε τῆς μάχης πέρι「私の中にこの戦いに関する彼らの結末が生じますように」(422f.) という表現は，イスメーネーの伝えた神託の一部の ἐν σοὶ τὰ κείνων... γίγνεσθαι κράτη「あの人たちの勝利はあなたのうちに生じる」(392) と類似し，伝え聞いた神託の表現を活用したような措辞になっている．前章で観察したように，テーバイに帰国しない決意を既に明らかにしており (408)，その結果として，神託に照らせば，エテオクレースもポリュネイケースも勝利を得られなくなるはずである．そのような結末を，オイディプースは具体化しながら願っている．それは，息子たちのどちらも，オイディプースを思う気持ちよりも優先させた τὴν τυραννίδα「王権」(419) を失った状態になるということである．彼の胸には，テーバイ人の心積もりを聞いた時からテーバイに対する反発があるが，息子たちに対する怒りは，それと一体化する形で表出されている．上に引用した 421-27 行に続いて，オイディプースがテーバイを追われた時のことが語られているが，そこではオイディプースを追放した者として，テーバイの国と息子たちが並挙されている (427-49)．一連の台詞の中で，オイディプースの決意はもう一度繰り返される．

ἀλλ᾽ οὔ τι μὴ λάχωσι τοῦδε συμμάχου,
οὐδέ σφιν ἀρχῆς τῆσδε Καδμείας ποτὲ
ὄνησις ἥξει· τοῦτ᾽ ἐγῷδα, τῆσδέ τε
μαντεῖ᾽ ἀκούων, συννοῶν τε θέσφατα
παλαίφαθ᾽ ἁμοὶ Φοῖβος ἤνυσέν ποτε. (450-54)
しかし彼らにはこの私を味方につけさせるものか，
また彼らには決してこのカドモスの国の支配からの
旨味がやって来ないだろう．そのことを私はわかっているのだ，
この娘から予言を聞き，また遂にポイボス様が私の為に
果たした昔の神託を熟考して．

ここでは，オイディプースは，息子たちの συμμάχου「味方」(450)[13] にな

13 この語は直訳すれば「ともに戦う者」という意味であり，息子たちに対するオイディプー

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



らないと宣言している．それは，神託に照らせば，テーバイの王権が息子たちのものにならないことを意味する．それをここでは οὐδέ σφιν ἀρχῆς τῆσδε Καδμείας ποτὲ ὄνησις ἥξει「また彼らには決してこのカドモスの国の支配からの旨味がやって来ないだろう」(451f.) と直説法未来形を用いて断定的な言葉遣いで表している．そして彼は，これらを理解する手掛かりとなったのが，イスメーネーの伝えた神託と，θέσφατα παλαίφαθ'「昔の神託」(453f.) すなわち第一の神託であると述べる．なお，彼は二つの神託を考え合わせて，自分がもしテーバイに帰国しなかった場合，息子たちがともに勝利と王権を手に入れられなくなるばかりでなく，死後，自分の墓のある場所でテーバイ人が災いを被ることも成立し得るのだと気がついている．それは，以下に引用する合唱隊への呼びかけの部分に看取できる．

> ἐὰν γὰρ ὑμεῖς, ὦ ξένοι, θέλητ' ἐμοὶ / σὺν ταῖσδε ταῖς σεμναῖσι δημούχοις θεαῖς / ἀλκὴν ποεῖσθαι, τῇδε μὲν πόλει μέγαν / σωτῆρ' ἀρεῖσθε, τοῖς δ' ἐμοῖς ἐχθροῖς πόνους. (457-60)
> というのも，異国の人々よ，もしあなた方が人々の護りとなるこの厳かな女神たちとともに私を保護してくれるならば，一方でこの国にとっては大いなる救済者を，他方で私の敵たちにとっては苦難を手に入れるだろう．

オイディプースは，イスメーネーがやってくる以前からアテーナイによる保護を願い出ており，上の引用箇所はその件に関するアピールと解釈できる．彼は，アテーナイが自分を受け容れることによって得られる利益を，τῇδε μὲν πόλει μέγαν σωτῆρ' ἀρεῖσθε, τοῖς δ' ἐμοῖς ἐχθροῖς πόνους「一方でこの国にとっては大いなる救済者を，他方で私の敵たちにとっては苦難を手に入れるだろう」(459f.) という文言で提示する．この構文では，アテーナイが得る救済者とオイディプースの敵たちが得る苦難は，同一の条件から

---

スの敵意を感じさせる．この箇所で導入されている戦争のイメージは，一連の台詞の最後にある τοῖς ἐμοῖς ἐχθροῖς「私の敵たち」(460) という表現で更に強く表出されている．オイディプースが第二の神託を聞いて選択した息子たちとテーバイへの仕打ちは，彼にとっての戦争として描き出されている．戦争のイメージは息子たちへの呪いの場面(1370-96)にも受け継がれている．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



導かれる帰結として，μέν-δέ の対照表現で表出されており，実質的に同一の事柄が立場の違いに応じて全く異なった事態となることが読み取れる．この帰結節の後半部分はくびき語法（zeugma）になっており[14]，オイディプースがアテーナイにとって救済者となることと彼の敵である息子たちとテーバイ人に苦難が生じることが表裏一体の関係にあることを，文の構造によって示しているのである．

その具体的な実体，すなわち，アテーナイにとって恩恵となり，テーバイにとっては災いとなるはずの事態を，オイディプースがどのようなものと考えているかは，テーセウスと対話する場面（551-667）でより詳しく知ることができる．まず，彼は，アテーナイにとっての κέρδη「利益」(578) が明らかになる時期を，自分が死んでテーセウスが自分の埋葬者となった時だと告げている（582）．そして，その利益を以下のように明かす．

καὶ ταῖσι Θήβαις εἰ τανῦν εὐημερεῖ
καλῶς τὰ πρὸς σέ, μυρίας ὁ μυρίος
χρόνος τεκνοῦται νύκτας ἡμέρας τ᾽ ἰών,
ἐν αἷς τὰ νῦν ξύμφωνα δεξιώματα
δόρει διασκεδῶσιν ἐκ σμικροῦ λόγου·
ἵν᾽ οὐμὸς εὕδων καὶ κεκρυμμένος νέκυς
ψυχρός ποτ᾽ αὐτῶν θερμὸν αἷμα πίεται,
εἰ Ζεὺς ἔτι Ζεὺς χὠ Διὸς Φοῖβος σαφής. (616-23)

テーバイにとって，たとえ今あなたとの関係が申し分なく
好天であっても，無限の時というものが流れていくにつれて
無数の夜と昼を生み出す，
その間に現在の親密な友誼が些細な理由から槍で切り裂かれるだろう．
その場所ですでに地に覆われて眠る私の冷たい屍が
いつの日か彼らの熱い血潮を飲むだろう，
もしゼウスがなおゼウスであり，ゼウスの御子ポイボスが真実を話

14 Kamerbeek (1984) p. 82.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



すものならば.

オイディプースは，ὁ μυρίος χρόνος「無限の時」(617f.) という遠大な視点を導入し，その時間的な広がりのどこかで，テーバイとテーセウスの国アテーナイとの友誼に綻びが生じるだろうと述べる (616-20). δόρει「槍で」(620) という言葉は，その破綻が武力衝突の形で現れることを示唆している．その時に彼が果たす役割は，οὐμὸς εὕδων καὶ κεκρυμμένος νέκυς ψυχρός ποτ' αὐτῶν θερμὸν αἷμα πίεται「すでに地に覆われて眠る私の冷たい屍が彼らの熱い血を飲むだろう」(621f.) と表現されている．それはオイディプースの墓がある場所でテーバイ人が傷つき斃れ，その滴り落ちた血が地面に吸い込まれて，地中にある彼の亡骸を濡らすことを意味する[15]. 墓で νέκυς ... πίεται「屍が飲む」という言い回しが，灌奠の儀式を髣髴とさせ，テーバイ人の血の犠牲が死せるオイディプースの慰撫になるという恐ろしい図式を浮き上がらせる．これに続けて，オイディプースはゼウスと予言の神アポッローンの名を出し，この話の信憑性と正当性をアピールする (623). そして彼は，以下に引用するように，コローノスの地こそそのような事態が起こる場所だと述べる.

> ἀλλ' ὁ χωρός ἐσθ' ὅδε —— / ἐν ᾧ κρατήσω τῶν ἔμ' ἐκβεβληκότων. (644, 646)[16]
> しかしその場所はここなのだ——私を放逐した者たちを打ち負かすことになる場所は.

τῶν ἔμ' ἐκβεβληκότων「私を放逐した者たち」(646) とは，先に触れた部分 (616-23) を考慮すると，オイディプースを追放した同時代のテーバイ人に限定されず，後の世代のテーバイ人を含意していると考えられる．この箇所では，テーバイ人は時間的に無限定な存在としてオイディプースの怒

15 Cf. Jebb (1900) p. 105, Kamerbeek (1984) p. 100. この表現においては，νέκυς ψυχρός「冷たい屍」が死を象徴し，θερμὸν αἷμα「熱い血潮」が生の象徴となっているが，ψυχρός と θερμὸν という対義語の形容詞によって死と生の対比を強調している．表現全体の趣旨は，死者が生ける戦士たちを凌駕するという逆説的な状況を示し，オイディプースの屍の持つ恐ろしい力が際立つ表現になっている.

16 引用した部分は，間にテーセウスの台詞を一行挟んでいるが，一つの文として理解できる.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



りの矛先となっていると言えよう．なお，κρατήσω「打ち負かすだろう」という動詞は，現在テーバイ人がオイディプースをκρατέω「支配し」ようとしていること（400）に対する意趣返しを意識した言い方であり，オイディプースの報復という一面を浮かび上がらせる．このようにオイディプースは，テーセウスに対して保護と死後の埋葬を願い出る時の説得材料として，死後アテーナイに齎す恩恵を掲げる．そして，その情報源が神託であることを匂わせる．しかし，この場面で彼が語る内容は，劇中の神託の文言に矛盾するところはないが，より詳しくなっており，既出の神託を具体化した形で観衆に提示しなおしていると見ることができる．

第二エペイソディオンでは，イスメーネーが予告したとおりにクレオーンが到来し，オイディプースをテーバイに帰るよう説き伏せようとする（728-60）．彼の演説は，今許されてテーバイに帰還することがオイディプースにとっていかに分別ある選択かという論旨でまとめられているが，現在のテーバイにポリュネイケース率いるアルゴスの軍勢が攻めて来ようとしていることや，神託でオイディプースの身柄が重要だと言われていることには一切触れていない．しかし，オイディプースは，クレオーンが自分を連れていこうとする本当の理由をイスメーネーの報告で知っている為，クレオーンの演説に隠されている欺瞞を見透かすことができる．オイディプースと同じく彼女の報告を聞いている観衆にとっても，彼がその欺瞞を看破することは，容易に納得できるものとなっている．これは，第二の神託がクレオーンの登場以前に明かされていることが齎す効果である．オイディプースは，クレオーンの来訪目的を言い当てた後で，反発も露わに，彼の説得に従わない意向を明らかにする（784-87）．その反発は，以下のような宣言に受け継がれる．

> ... σοι τάδ᾽ ἔστ᾽, ἐκεῖ / χώρας ἀλάστωρ οὐμὸς ἐνναίων ἀεί· / ἔστιν δὲ παισὶ τοῖς ἐμοῖσι τῆς ἐμῆς / χθονὸς λαχεῖν τοσοῦτον, ἐνθανεῖν μόνον. （787-90）
> あなたにあるのはこれだ――国土に対する私の復讐神が永遠にあちらに住まうことだ．そして私の息子たちにとって私の土地のうちで分け前に与ることができるのは，その中で死ぬことだけだ．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



上に引用した箇所の前半は，テーバイに対するオイディプースの復讐心が永遠にテーバイに向けられるだろうという趣旨だと理解できる．ここの表現は，クレオーンがオイディプースをテーバイの国の「傍らに住まわせる」(785) つもりであったのを受けて，オイディプースの肉体ではなく ἀλάστωρ「復讐神」(788) がテーバイの ἐνναίων「中に住む」(788) と言っているのであり，オイディプースの胸中にある，報復的な意志を感じさせる．そのような復讐への意欲は，引用した箇所の後半 (789f.) にも読み取ることができる．彼はここで，息子たちがテーバイで死ぬことを告げているが，χθονὸς λαχεῖν「土地の分け前に与る」(790) という言い回しは相続を意識しており，この表現では，彼らがテーバイで死ぬことが，オイディプースから与えられる遺産に相当する．このようにしてテーバイと息子たちの行く末を断言した後で，オイディプースは，自分がテーバイの情勢を知っているのは，アポッローンとゼウスから聞いたからだと明かす (791-93)．これは，神託のことを含意していると考えられる[17]．

オイディプースとクレオーンの対話は次第に険悪さを増し，やがてクレオーンは，言葉による説得を放棄して，娘たちとともにオイディプースを力ずくで連れて行く素振りを見せ始める．その時の言い争いの中で，オイディプースはクレオーンに呪いの言葉を吐きかける (864-70)．彼は，自分にとって物を見る眼の役割を果たしているアンティゴネーをクレオーンが奪い去ったことに触れてから，次のように述べる．

> τοιγὰρ σὲ καὐτὸν καὶ γένος τὸ σὸν θεῶν / ὁ πάντα λεύσσων Ἥλιος δοίη βίον τοιοῦτον οἷον κἀμὲ γηρᾶναί ποτε. (868-70)
>
> それゆえあなた自身にもあなたの一族にも，神々のうちで全てを見ているヘーリオスが，いつの日か私と同じような老いを送らせますように！

この呪いの内容は，クレオーンや彼の一族がオイディプースと同じような老年の日々を送ることである．本劇において，オイディプースは彼自身の

17 Jebb (1990) p. 105f., 132.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



人生を，苦難に満ちた惨めな生だと言い表している．従って彼が望んでいるのは，クレオーンとその一族が自分と同様に，苦難に満ちた惨めな老年を送ることだと考えられる．この呪いは，劇中では成就することはなく，神託でも劇中の他の部分でも関連するところがないので，成就を確信させるような点もあるとは言えない．クレオーンは，伝承の上では，テーバイ攻めの直後に妻と子に先立たれることになるので，その意味では，クレオーンに関してはこの呪いは劇の外部で成就すると言える[18]．

クレオーンの脅威が去った後，アテーナイにはポリュネイケースが到来する．彼は味方のアルゴス勢とともにテーバイに向かう遠征の途上であり，来るべき戦争で勝者となるためにオイディプースの同行を求めて嘆願する(1254-79, 1284-345)．既にイスメーネーが証言しているように(416ff.)，彼は第二の神託（385-415）を知っており，その神託が差し迫ったテーバイとの戦争に関する神託だと解釈している[19]．クレオーンの場合と同様，ここでも神託は，ポリュネイケースが来訪する動機を与えている．さて，彼が憐れみと同行を求めると，その懇願をオイディプースは呪いとともにはねつける（1348-96）．その核心部分である二箇所を，以下に引用する．

> οὐ γὰρ ἔσθ᾽ ὅπως πόλιν / κείνην ἐρείψεις, ἀλλὰ πρόσθεν αἵματι / πεσῇ μιανθεὶς χὠ ξύναιμος ἐξ ἴσου. (1372-74)
> つまりお前があの都市を破壊することは決してなくて，その前に血に汚されて滅びるだろう，そして血を同じくする者も同様に．

オイディプースは，聞き手のポリュネイケースに対して ὅπως πόλιν κείνην ἐρείψεις「お前があの都市を破壊すること」はないと告げ，テーバイの攻略に失敗することを述べている．これは，第二の神託を聞いた直後にもオイディプースが願っていることである（421-27）．クレオーンと対峙している場面では，息子たち二人のテーバイでの死が言及されていた（789f.）．上の引用箇所では，さらにその死に様にも触れており，エテオクレース

18 Jebb (1990) p. 143f.
19 Cf. 1331f.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



とポリュネイケースの相討ちが，劇中で初めて話題に上る．それは αἵματι πεσῇ μιανθεὶς「血に汚されて滅びるだろう」(1373f.) と言い表されているが，この αἵματι「血」がポリュネイケース自身ではなく，系譜上全く同じであるエテオクレースの血を指していることは，続く χὠ ξύναιμος ἐξ ἴσου「血を同じくする者も同様に」(1374) という文言で，より明瞭になる．これとほとんど同じ内容が，一連の台詞の中で，もう一度繰り返される．

σὺ δ' ἔρρ' ἀπόπτυστός τε κἀπάτωρ ἐμοῦ,
κακῶν κάκιστε, τάσδε συλλαβὼν ἀράς,
ἃς σοι καλοῦμαι, μήτε γῆς ἐμφυλίου
δόρει κρατῆσαι μήτε νοστῆσαί ποτε
τὸ κοῖλον Ἄργος, ἀλλὰ συγγενεῖ χερὶ
θανεῖν κτανεῖν θ' ὑφ' οὗπερ ἐξελήλασαι. (1383-88)
私にひどく憎まれて子とも認められない者としてお前は立ち去れ，
悪い者たちの中で最も悪い者よ，私がお前のために呼ぶ
この呪い――生まれた国を槍で掌握することも
いつか盆地のアルゴスに帰還することもなく，
同族の手で死に，かつお前を追放したその男を
殺すべしという呪いを背負いながら．

オイディプースはこの箇所でも，ポリュネイケースの遠征の不首尾と，エテオクレースとの相討ちの末路を願っている．μήτε γῆς ἐμφυλίου ... κρατῆσαι「生まれた国を掌握することもなく」(1385f.) という表現は，ポリュネイケースが起こそうとしている戦争の異常さを連想させる[20]と同時に，κρατῆσαι と同語根である κράτος「勝利／権力」(1332) を手に入れる為にオイディプースに同行を求めに来たポリュネイケースの懇願を強く拒絶し，その意図を挫こうとする意志を反映している．そうした遠征の失敗に加えて，オイディプースは，μήτε νοστῆσαί ποτε τὸ κοῖλον Ἄργος「いつか盆地のアルゴスに帰還することもなく」(1386f.) と，敗走すら叶わないこ

20 Jebb (1900) p. 215.

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



とを祈願している．そして最後に，そういった状況の中で起こるべき相討ちを，συγγενεῖ χερὶ θανεῖν κτανεῖν θ'「同族の手で死に，かつ殺す」(1387f.) という語句で言い表している．句中の συγγενεῖ χερὶ「同族の手」(1387) は，ポリュネイケースにとってのエテオクレースの手と，エテオクレースにとってのポリュネイケースの手を指しており，γῆς ἐμφυλίου (1385) 同様，二人の死に様の異常さを想起させる効果がある．

ポリュネイケースは，このようにオイディプースに拒絶された後も，テーバイへの遠征を断念しようとしない．彼に向かってアンティゴネーは，軍勢をアルゴスに引き返させるように説得を試み，二人の対話が繰り広げられる (1414-47)．撤退を拒むポリュネイケースに，彼女は次のように食い下がる．

> ὁρᾷς τὰ τοῦδ' οὖν ὡς ἐς ὀρθὸν ἐκφέρεις / μαντεύμαθ', ὃς σφῷν θάνατον ἐξ ἀμοφοῖν θροεῖ; (1424-25)
> それではあなた方二人にお互いからの死を宣告したこの人の予言を，あなたが成就させつつあるのだとわかっているのですか？

この台詞は，ポリュネイケースが自身の行く末の選択を迫られていることを示唆している．彼女はオイディプースの呪いを μαντεύμαθ'「予言」(1425) という語で呼び表しており，ポリュネイケースが遠征を続行すれば，オイディプースの呪いが実現するかもしれないという危機感を抱いていることがわかる[21]．こうした語の使用は，観衆に対してオイディプースの呪いが実現する可能性が高いと印象づける一助になると考えられる．さて，ポリュネイケースは結局アンティゴネーの説得に従おうとせず，オイディプースの呪いの件を盟友たちに伏せたまま，テーバイに進軍を続ける決意を固める．この場面でポリュネイケースが最終的にテーバイ攻めの敢行を決断することは，テーバイとアルゴスの戦争が不可避の未来として実現することを観衆に予感させると考えられる．

ポリュネイケースが去り，死が近いのを悟ったオイディプースの求めで

21 アンティゴネーはこの直後の 1428 行でも，先立つオイディプースの呪いを ἐθέσπισεν「彼が託宣した」と，予言のようにとらえた言い方をしている．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



テーセウスが再び登場した後，オイディプースは，自分が死後アテーナイに齎す恩恵について言い残す（1518-55）．それは事実上，将来テーバイが受けるべき災難を明らかにするものである．オイディプースは，自分が死ぬべき場所へテーセウスを導くことを告げてから（1520f.），以下のように続ける．

> τοῦτον δὲ φράζε μήποτ᾽ ἀνθρώπων τινί, / μήθ᾽ οὗ κέκευθε μήτ᾽ ἐν οἷς κεῖται τόποις· / ὥς σοι πρὸ πολλῶν ἀσπίδων ἀλκὴν ὅδε / δορός τ᾽ ἐπακτοῦ γειτονῶν ἀεὶ τιθῇ. （1522-25）
> 他方で，人間のうちの誰かに決してこの場所を告げてはならない，どこに隠されているかも，どの辺りに横たわっているのかも．その結果，この私が隣にあって，多くの楯と異邦の槍にまさる護りをあなたに常に差し出すだろう．

オイディプースは，自分の死に場所を漏らしてはならないと告げる（1522f.）．彼の死に場所は，すなわち墓の在り処となるものであり，その墓のところでテーバイ人に災いが降りかかることが，第二の神託で予言されている[22]．その場所を秘しておくことで，オイディプースは ἀλκὴν ... τιθῇ「護りを差し出すだろう」（1524f.）と述べているが，その護りとは，アテーナイに攻め入ろうとするテーバイ人がオイディプースの墓のある場所で斃れることを意味していると考えられる[23]．そのような形でテーバイ人を撃退するはたらきを，オイディプースは πρὸ πολλῶν ἀσπίδων ἀλκὴν ... δορός τ᾽ ἐπακτοῦ「多くの楯と異邦の槍にまさる護り」（1524f.），つまり，多数の市民による防御と同盟している他国の援軍よりも強力な援護だと表現しているのである．このようなはたらきは，「多くの楯と異邦の槍」という比較対象を取ることで，σύμμαχος「ともに戦う者」の活躍として印象づけられる．上の引用中でもう一つ注目すべきは，ἀεὶ「常に」(1525) という言葉である．この ἀεὶ という語に集約される ἀλκὴν「護り」の不朽性[24]

22 Cf. 409-11.
23 Cf. 409-11, 616-23.
24 オイディプースは，この一連の台詞の語り出しのところから γήρως ἄλυπα「老齢に損なわ

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



は，オイディプースが死んで墓が出来れば，その墓が破壊でもされない限り，永久に存在し続けることに由来する．従って，彼の墓が無事である間は，その墓による守護もはたらき続けるということになる．そのはたらきを恒久ならしめる方法を，オイディプースは以下のように指示する．

ἀλλ᾽ αὐτὸς αἰεὶ σῷζε, χὥταν ἐς τέλος
τοῦ ζῆν ἀφικνῇ, τῷ προφερτάτῳ μόνῳ
σήμαιν᾽, ὁ δ᾽ αἰεὶ τὠπιόντι δεικνύτω.
χοὕτως ἀδῇον τήνδ᾽ ἐνοικήσεις πόλιν
σπαρτῶν ἀπ᾽ ἀνδρῶν· (1530-34)
どうか常にみずからで護りなさい，そして生の終わりに
達したら，最も優れた一人だけに教えなさい，
そして常にその者が後継者に示すようにしなさい．
そしてこのようにすれば，あなたは蒔かれた種族の男たちに
損なわれないでこの国の中に住んでいられるだろう．

オイディプースが指示する方法とは，テーセウスが αἰεὶ「常に」(1530) 彼自身でオイディプースの死んだ場所を守り，彼が死ぬ時には，最も優秀な後継者ただ一人に伝えること，それを αἰεὶ「常に」(1532) 繰り返すことである．このようにして件の場所を秘密にすることで，ἀδῇον τήνδ᾽ ἐνοικήσεις πόλιν σπαρτῶν ἀπ᾽ ἀνδρῶν「あなたは蒔かれた種族の男たちに損なわれないでこの国の中に住んでいられるだろう」(1533f.) とオイディプースは告げるが，この箇所の主語の二人称はテーセウスだけでなく，その後継者たちをも含意していると解釈できよう．ここで想定されている敵は，σπαρτῶν ... ἀνδρῶν「蒔かれた種族の男たち」(1534)，つまりテーバイ人であり，オイディプースがアテーナイに対する利益として明かした事態が，撃退される側のテーバイにとっては災厄となることが確認される．以上で考察したように，一連の台詞でオイディプースが述べることは，最初にテーセウスの前で仄めかしたこと (616-23) に一致するが，先立つ場面では，

れないもの」(1519) として，自分が齎すものの不朽性を強調している．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



それが神託によって知らされたものだと述べているのに対し，この場面では神託に対する言及はなされない．上に引用した二つの箇所では，命令形が使われ，その命令に付随して，その結果どうなるかが未来形で言い表されるというパターンが使われており，予言のような響きを帯びた遺言に仕立てられている．

## 4 おわりに

これまでの議論で，本劇においてテーバイに関する神託が，テーバイにとってのオイディプースの重要性を劇内部に導入する装置になっていることが明らかになった．つまり，オイディプースの墓がいつかテーバイ人に災いをなすことになるかもしれないという将来の可能性が，盲目の老人で放浪の身の上である現在のオイディプースに，看過し難い価値を付与していると言える．また同時に，第二の神託（385-415）は，その価値をテーバイ人に明かし，イスメーネー，クレオーン，ポリュネイケースが登場する理由を成立させ，これら登場人物の人物像を理解させる仕掛けとしても機能している．このように，オイディプースがテーバイから帰国を望まれるようになったことで，本劇が展開する時間は，オイディプースの生涯における転換点として，二つの側面を持つようになった．すなわち，帰属する都市をもたない放浪の境遇から，新たな都市の保護下に入るという変化だけでなく，アテーナイとテーバイという二つの都市のいずれに帰属するかという選択を描くものになっているのである．そして，その選択の機会において，オイディプースが神託への理解をもとにテーバイに帰国しないと決意することで，テーバイに関する神託は，将来の災いが実現するばかりでなく，差し迫ったテーバイでの戦争も実現し，ポリュネイケースとエテオクレースにとって悲惨な結末となることを観衆に予感させるはたらきを担っている．

しかし，二つの主要な神託が開示された段階では，そのような未来がどのように実現するのかは，詳らかになっていない．その内容を補うのが，オイディプースの台詞に散りばめられた予示表現である．そこで，二つの神託から導き出される二つの未来の出来事，すなわち，(a) テーバイとア

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



ルゴスの戦争およびポリュネイケースとエテオクレースの破滅，(b) アテーナイに攻め込むテーバイ人の敗北，そのそれぞれについて，第三章で取り上げた予示表現が開示している内容をまとめてみたい．

まず (a) について見てみると，ポリュネイケースとエテオクレースの争いが現状のまま進展して，来るべきテーバイでの攻防戦において，二人が互いに刺し違えて死ぬことが予示されている．この戦争は，核心に王族同士の諍いがある点でテーバイの内乱でもあり，オイディプースの一族にとっては王権をめぐる近親間の内紛に他ならない．従って兄弟相討ちという結着は，当の二人の破滅を意味すると同時に，繰り返される骨肉の争いの末にこの一族が迎える破滅を象徴する事件と言える．これらについての予示は，願望の表明，断定，呪いなど，様々な体裁を取っているが，表れる順に眺めていくと，オイディプース自身がそのような将来の出来事を喜んで受け止め，その実現を強く望んでおり，内容が次第に詳細になっていくという特徴が観察できる．そして，その内容は，最終的にオイディプースの呪い (1370-96) という形で表出される．テーバイの攻防戦は，本劇が擁する時間よりも未来のことにあたり，オイディプースの呪いが成就を見ないうちに劇は終わっているが，この呪いが実現することになると観衆に感じさせる要素を本劇は具えている．というのは，テーバイに関する神話伝承の中でも，まさに本劇でオイディプースが祈願している通りに，二人の息子はこの戦争で相討ちの最期を迎えるからである．つまり，オイディプースの呪いは，伝承で既に確立されているテーバイの攻防戦の結末を写し取っていると言えるだろう．また，二人の争いをオイディプースが呪って祈願したという伝承もあり[25]，ソポクレースは場所をコローノスに移しながらも，先行する伝承をなぞったのかもしれない．テーバイの攻防戦にとって，オイディプースの呪いと，呪いを聞いた後のポリュネイケースの決断は，どちらも戦争勃発に至る決定的な運命の岐路にあたる．本劇はその場面を劇中に内包することで，テーバイとオイディプースの息子たちにとっても，運命の転換点として結びついている．そしてその転換点におい

25 Cf. *Thebais.* fr. 2, 3, Aesch. *Sept.* 786-91, Eur. *Phoen.* 66-68. なお，『テーバイス』断片 2, 3 の原文テキストは，Malcolm Davies, *Epicorum Graecorum Fragmenta*, Göttingen, 1988 に依拠している．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



て，戦争の結末を提示しておくことで，オイディプースに続く世代の悲劇をも物語の射程に取り入れ，より広いパースペクティブを獲得していると考えられる．

次に（b）について見てみると，オイディプースの死後，いつかテーバイ人とアテーナイ人の間に争いが生じてテーバイ人が攻めて来た時，オイディプースの墓のある場所でテーバイ人が傷つき斃れること，その守護が永久に続くことが予示されている[26]．テーバイに関する神託では，オイディプースの墓のある場所でテーバイ人が災いを被ること，それがオイディプースの怒りによることのみが言われており，オイディプースによる予示において，それがテーバイ人の侵攻時にコローノスで起こり，彼らが斃れる事態を指すというように方向づけている．オイディプースは，このような未来を秘すべきことと考え，あまり詳細を語りたがらない．そのように秘密にしておくことが，彼の恩恵を永久に保つ為に重要だと理解しているからである．（b）に関しては神託も予示表現も，その出来事が起こる時点に全く言及せず，その一方でオイディプースの守護の永久性を伝えている．その結果，（b）が実現する可能性のある未来は，オイディプースの死以降，時間上無限定な広がりを持つように感じられるだろう．その永続的な時間にとって，本劇におけるオイディプースの最期はまさにその起源として重要な意味を有する．

このように，本劇の神託が描き出す「未来」の輪郭は，アテーナイとテーバイにおけるオイディプースの潜在的な影響力を劇の「現在時」に導入している．殊にテーバイに関する神託は，オイディプースとテーバイの運命を結びつけることで，劇内部にテーバイの情勢が関わる背景を整えている．劇中の諸処に現れる予示表現は，テーバイに対するオイディプースの影響力を絶えず観衆に思い起こさせて劇の緊張感を維持するとともに，神託から導き出される未来像をより詳細にし，劇の外側にある時間上の広がりを取り込むことで，本劇が展開する時間を，オイディプースにとってもテーバイにとってもオイディプースの息子たちにとっても重大な運命の転換点

26 これは，アテーナイ人にとっては利益（りやく）であるが，テーバイ人から見れば災いとなる．劇中の予示表現には，その二面性を対照しているもの（457-60）と，アテーナイに対する利益として語られるもの（616-23, 1522-25, 1530-34）がある．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University



として位置づけている．以上のように，本劇における神託は，遠大な時間と，二つの都市という空間の広がりを劇中に関連づけ，それらの運命にも関わる転換点での物語として本劇を成立させる役割を担っている[27]．

27　本稿は東京都立大学哲学会第30回研究発表大会における口頭発表をもとにしている．

NII-Electronic Library Service